

## 生き生きと学ぶ高齢者たち

— 大崎上島「よってみんなさい屋」の活動から —

呉大学看護学部

津 田 右 子

### ■ はじめに

「よってみんなさい屋」は、広島県豊田郡大崎上島町（旧大崎町）にある。大崎上島町（2003年4月1日に大崎町、東野町、木江町の3町が合併）は瀬戸内海の中央、芸予諸島に浮かぶ大崎上島にあり、広島県本土側とは、竹原、安芸津港と高速船、フェリーで結ばれている。「よってみんなさい屋」は、近所のお年寄り達に、気が向けばよってみんなさいや、気楽におしゃべりしましょうや、というメッセージをもって活動している。「よってみんなさいや」というのは「寄ってみませんか」という意味の広島弁である。

筆者は2001年12月14日（金）、呉大学山下洵子教授（以下、日頃の呼び方に従って山下さんとする）の「食べ物の旅、第4回 牛肉—狂牛病」の出前ミニ授業が開催された時に同伴した。そして、

2003年9月12日（金）に再度、「よってみんなさい屋」の活動に参加する機会を得た。この訪問を通して、「よってみんなさい屋」に参加している高齢者達の生き生きと楽しく学ぶ姿が印象に残った。ここにその様子を報告する。（図1・図2）

### ■ 大崎町の高齢者人口と「よってみんなさい屋」

人生80年といわれているが、わが国の2002年の平均寿命は男性78.32歳、女性85.23歳である。65歳以上の人口割合は2001年17.8%である。その割合は2006年に20%となり、2038年には30%をこえる。

日本は高齢化社会の先行国、スウェーデンの約3倍の速さで高齢化社会を迎えるといわれ、しかも「これまでも、これからもスウェーデンが経験しなかった、経験しないであろう高齢化社会を迎



図1 「よってみんなさい屋」の看板



図2 「よってみんなさい屋」の出前ミニ授業の様子

つだ ゆうこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

表1 2000年の広島県と大崎町の年代別人口（（文献2）より抽出作成）

人口(人) 地名	総数	15歳未満	15～64歳	65歳以上
広島県	2,878,915	428,035	1,916,796	531,537
	100%	14.9%	66.6%	18.5%
大崎町	4,351	506	2,383	1,462
	100%	11.6%	54.8%	33.6%

表2 大崎町の概要（（文献2）より抽出作成）

面積	20.44Km
人口	4,351人
	(男2,004人、女2,347人)
就業者数	2,189人
第1次産業	494人(22.6%)
第2次産業	467人(21.3%)
第3次産業	1,228人(56.1%)
昼夜間人口比率	102.1
男女性比	85.40%
工業出荷等	29.3億円
商業販売額	64.2億円
事業所数	305所
農業粗生産額	7.1億円
持ち家比率	83.50%
高齢単身者数	326人

\* 商業販売額（1997年）、事業所数（1996年）以外の項目は2000年データ。

える」のである<sup>1)</sup>。現在20才の男女が38年後58歳の頃、3人に1人は65歳以上となると予測される。

旧大崎町の概要と人口は表1・表2<sup>2)</sup>のようである。2000年では65歳以上の人口は33.6%と表示されている。これは、まさに、日本全体の38年後のデータである。高齢者人口30%を先取りした高齢者社会が大崎上島町に現れている。因みに広島県の高齢者人口18.5%をはるかに超えている。

このように65歳以上の人口が多い大崎上島では、老人たちへの生涯教育について、積極的に活動している。その活動の一つである、社会教育センターとして、大崎上島開発総合センターがある。全町民を対象に生涯学習講座を開講している。その中にはもちろん高齢者教室がある。この生涯教育は町が行なう高齢者を支援する組織的な生涯教育の一環である。

それと比較すると、「よってみんない屋」は参加者が自分の自由意志で、自分達の力で運営していることが特徴である。会場は古い民家を借りて

いる。お世話役としてボランティアの辰田早智子さんが中心になって、何十人もの中年世代の女性達が熱心に活動している。

#### ■ 生涯教育 (life long integrated education) とは

生涯教育は昭和40年（1965年）のユネスコの成人国際教育委員会において、フランスのポール・ラングランが「生涯教育」という理念を提唱したことに始まる。生涯教育とは、生涯にわたって統合された教育である。それは「永久教育」「恒久教育」とも訳されるが、日本語としては「生涯教育」が採用された。彼は1970年に『生涯教育入門』を著し、その後の生涯教育に理論的・政策的影響をあたえた。生涯教育は英語訳で「life long integrated education（生涯にわたって統合された教育）」とされている<sup>3)</sup>。ここで統合というのは、時間的（垂直的）統合と空間的（水平的）統合をさす。時間的（垂直的）統合とは、人が生まれてから死ぬまで、人生の段階それぞれにふさわしい学習の機会が継続的に確保されることである。空間的（水平的）統合とはその学習の機会が学校だけでなく、家庭、職場、地域社会など生活のあらゆる場で確保されることである。即ち、生涯教育とは人間の一生にわたるタテと、個人および社会の生活全体にわたるヨコとを、教育という関心によって統合することを意味する。この概念の普及によって、最近では「統合」を省略し、単に“life long education”といい、わが国でも「生涯教育」として、定着している。

人間の発達には生涯にわたるという観点から、生涯教育にはひとりひとりの生涯発達を可能とする教育の時間や場所が開かれていなければならない。生涯教育の理念は、どこでも、いつでも、だれで

も、なんでも、だれからでも学習できる体制をつくることである。このようなことから、「よってみんない屋」の活動について、まとめてみようと思う。

## ■ お年寄りの学ぶ意欲と主体性（山下さんの出前ミニ授業の様子から）

生涯教育の理念は、どこでも、いつでも、だれでも、なんでも、だれからでも学習できるということであり、これらの視点で以下のように考えてみた。

どこでも：生涯教育は学校や公民館にかぎらず、学習者が必要と考える場で行われる。「よってみんない屋」は民家を借りて、地域に根付いて活動している。そして昨年、分家が一軒増えた。活動が少しずつ広がっている。

いつでも：ここは毎週、火曜日と金曜日の午前9時から15時まで開放、分家は毎週水曜日9時から14時に開放している。この時間内であれば、だれでも予約なしに何時でも立ち寄って、何時帰ってもよい気軽な場所である。

だれでも：だれでも無料で参加できる。

なんでも：高齢者自身が主体的に学習テーマを選択することである。高齢者の希望を十分に反映している。

だれからでも：山下さんの話の途中で、「私ら、授業料を払わんのに、こがーな話きかせてもろうて、これでええんですかいのう…」と声が上がっていた。指導者や講演者を選ぶのは、高齢者である。だれからでも、学びたいという意欲がこの「よってみんない屋」にある。山下教授は「こちらこそ、ここで皆さまから学ばさせて頂いているのです」と答えている。

## ■ 高齢者とスピリッチャル（Spiritual）の課題

山下さんの「今日は狂牛病のお話があるんですよ」という言葉から出前ミニ授業が始まると、ある高齢者が、即座に「牛を沢山食べれば、ぼっくり死ねるありがたい話じゃね」と笑いながら私に声をかけた。そして、真剣に今日の資料に目を通しはじめた。「老いの受容」「死の受容」が高齢者の学習課題といわれている<sup>4)</sup>。

この高齢者の言葉から、そのことを考えさせられた。健康で長生きのために今回の「食べ物」の

話しがあると捉えるのではなく、「ポックリ死ぬために食べる」という言葉から高齢者の学習の特徴を身近に知ることが出来た。これは、狂牛病が怖い病気であり、死を感じさせるほどの印象を高齢者に与えているということから、高齢者の死生観である「ポックリ死にたい」が表現されたのである。死について、冗談まじりに大きな声でいえる場所がここである。

日野原重明は「人間は生まれたときから死の遺伝子をもっている。生について、医療は非常な努力をしてきた。しかし、死についてはどうだろうか。誰がケアをしてきたのだろうか。生と死はスピリッチャルな問題である。」<sup>5)</sup>とスピリッチャル・ケアの大会で提言している。大事な死の問題について、どこで私たちは教育をうけてきたであろう。そのことについて、医療はどのように貢献してきたのであろうか。老年期の生涯教育という場合、元気で長生きしましょうということが多いが、長生きばかりではなく、この高齢者のように、苦しまずぼっくり死ねるにはどうすればよいかという思いをおしゃべりできる場が必要なのだと思う。

このような状況を健康という面からみれば、生きることと死ぬことに関する哲学的な魂の問題ではないかと考えさせられた。

WHO（世界保健機関）は健康の定義に、スピリチュアルというキーワードを入れよう試みている。1997年に世界保健機関〈WHO〉の定義が50年ぶりに見直され、検討された。その定義とは「健康とは、肉体的、精神的、社会的、スピリチュアルに完全な状態、及び社会的福祉の行き届いた状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」というものである。スピリチュアルとは、日本語でいうと「こころの」「霊的な」「魂の」という意味である。しかし、この言葉には民族の宗教性が強調されることが予測されるため、この言葉をいれるかどうかは検討中である。

## ■ お年寄りのおしゃべりと笑顔（2回目の訪問から）

2回目の訪問時は、稲刈りの時期ということで、お年寄りの参加は11名であった。「よってみんない屋」の大崎上島町社会福祉協議会副会長であり、また地元の郵便局長でもある山田弘晃氏のお話と山下さんの「食べ物の旅（第16回）冷凍食品」のお話があった。

山田郵便局長さんはこの地区の出身である。山田家は祖父が初代の郵便局長であり、現在の弘晃さんは3代目である。その為、こちらの高齢者とは、顔なじみが多い。明治42（1909）年の大崎中野郵便局開局のときからのお話で、高齢者たちも関心が高く、自分達の子どもの時代を振り返りつつ、話題がひろがっていった。ここに参加しておられた最高齢者2人が96歳であり、郵便局の開局2年前に生まれていたことが話題になっていた。

山下さんの冷凍食品のお話が始めると、日本ではじめて冷凍食品になった食べ物は「苺」であると聞いて、高齢者がうなづく場面があった。冷凍食品は、昭和30年頃から、販売が始まったことがわかると、高齢者もその時代をたのしそに思い出しておられた。また、冷凍食品で一番多く生産されているものが「コロッケ」、2番目が「うどん」とであると教えられると、「わたしの家も、うどんをよく買うよ」という反応があった。また、マイナス70℃で急速冷凍しなくては、鮮度がおちるということから、家庭用冷凍庫では、それが難しいというお話にも真剣に耳を傾けていた。

日常の生活に密着した冷凍食品の話題であり、高齢者たちが互いに笑顔でおしゃべりされている

場面もあり、参加者たちの交流が図れたと思う。このときに流れていた楽しいなごやかな雰囲気は、ここに参加されている高齢者達の笑顔にあると感じた。皆様のおしゃべりをしているときの表情は豊かであり、和気藹々として、笑顔が絶えないのである。なごやかで、表情が豊かであるということは、人間性が豊かであるということであろう。

## ■ おわりに

「よってみんない屋」での山下さんの出前ミニ授業に参加させていただいたことから、「よってみんない屋」に集まる高齢者たちの学習意欲の高いことを知ることが出来た。その学ぶ姿は生き生きとして前向きであり、お話を聞くということ、質問をするということを楽しんでおられた。「よってみんない屋」という場所は、主体的に「学ぶ」ということを「みんなでおしゃべりしましょう」という気楽さのイメージを与えることで、成功していると感じた。

今回、このように楽しく生き生きと高齢者が生涯学習を実践している活動の場を知ることができたことに深く感謝している。

## 文 献

- 1) 黒澤椎昭編：苦悩する先進諸国の生涯学習，社会評論社，p.41，2000
- 2) <http://www.town.osakikamijima.hiroshima.jp/>
- 3) 白石克巳他：生涯学習テキスト－生涯教育への道，実務教育出版，p.4，1987
- 4) 山本恒夫：生涯学習ハンドブック，第一法規，p.190，1990
- 5) 日野原重明：臨床パストラルケア第4回全国大会 テーマ「スピリチュアルケア」開会挨拶より，2001年11月11日